



“アサ”の 書評ワールド(4:最終回)

浅川満彦 (副編集長) / 酪農学園大学

『ツキノワグマ すぐそこにいる野生動物』

山崎晃司 著, 東京大学出版会, 2017 年 8 月, 258 頁, 本体価格 3,600 円

少し前まで、評者が勤務先する大学には「将来、獣医師となって野生動物の保護をする仕事をしたい」という学生が沢山いた。話を聞くと活躍の場は、大概、アフリカ・サバナ。更新世的な迫力ある大型哺乳類がウジャウジャいる中に、自身が活躍する姿を想起している学生に、「それなら、保護って何？」と突っ込むと、「可哀そうな傷病動物の救護(救命)すること」と即答。救護＝保護管理・保全との混同は、かなり深刻なことなので、「野生動物医学」を兼務する評者が責任持って教育をしなければならない。だが、ご安心を。これはある程度、成功しているとの自負がある(それに、本章のような優れた「保護管理」に関する参考資料も充実しつつあるし;後述)。

しかし、かの暗黒大陸に比して、この島国に生息する獣が「なんとも地味！」と見なす先入観・根強い思い込みの修正はほぼ不可能である。そのような中であって、クマ類二種は完全に別格。うち一種ツキノワグマについて語ることを意図したのが本書なので、著者は清々しい気持ちで筆をすすめたはずだ。評者のライフワークが在来種と在来線虫との宿主-寄生体関係の生物地理でありそのモデルを野ネズミ類にした。野生好きの学生たちと話す、一番追いかけてきたのが野ネズミ類と知り「なーんだ」という顔を何度もされた。非カリスマ的動物を扱うものの劣等感はクマを追いかける著者には無いだろうなあ(愚痴は此处まで。閑話休題)。本書の序章冒頭で述べているように、今世紀に入ってから「大量出没」が深刻な問題となりつつあるのことは疑い無い。この現象が生じた原因とその対応策を詳述した本書刊行は社会貢献の性質も帯びることになった。したがって、保護管理(マネージメント)・保全などといった急速に人材が集まりつつある関連学部学科の学生にとって、最良の各論資料ともなろう。

実際、クマ類全般の分類や大陸産ツキノワグマが侵入した背景・経緯等を扱った第1章を除く、他五つの章で、著者が読者をフィールドに連れ出したような臨場感を持って、「大量出没」現象を丁寧に解説しているからだ。なお、第1章を蔑にしているわけではないことを急いで付記する。本書を構成する章の中で、最多80本の文献(巻末に18頁から成る各章引用文献一覧有り。注:この頁数は冒頭の総頁数には含まれていない)を引用しつつ、ツキノワグマとその類縁を持つクマ類の分類、形態、系統、生物地理、繁殖、食性、冬眠、行動に関する総説となっているからだ。ただ、評者専門性からするとツキノワグマの感染症あるいは保有寄生虫などの病原体の最新内容が欠落していたのは寂しい。もちろん、そういっ

たことを知りたくて、本書を手取るものはほばいないので無視しても、いっこうに構わない（どうせ、いつか、評者がまとめるだろうから）。

さて、第2章「森や人間の変化」では日本の植生や里山利用の変化、狩猟者数の動向から、分布域拡大と個体数増加について分析したものであった。次いで、第3章「人間との衝突」で具体的な農林業および畜産・水産業の被害とヒトの精神的・身体的影響について述べ、それらの大きな原因のひとつとして、本種の行動変化と結論している。第2章で拡大しつつある分布域について述べたのだが、逆に消滅しつつある四国・九州の個体群の動態について第4章でしっかり触れている。当然ながら、第3章で述べた人間社会と緊張状態にある地域では有害捕獲を含む保護管理施策が、一方、絶滅のふちに立たされた地域個体群では保全施策（この種の場合は、生息地外ではなく、生息地内保全が一般的）がそれぞれ講ぜられることになる。前者には殺戮行為を含むので（ただし、本書では殺戮を伴わない管理法も示されている）、それぞれ別向きの施策であると感じるかもしれない。が、根本では、両者、密接に関連している。このことを自然に理解出来る見事な筆致となっている。評者の拙文冒頭で獣医学部学生への保護と救護（愛護が動機となる）が混同されたことを示したが、そのような情けない状況も、第3章を丁寧に読み込めば氷解する（はず）。これはこの著者の能力が卓越していることも確かだが、王者の風格を漂わすツキノワグマが主役であることにも起因する（もっとも、この動物をライフワークに選んだのは、彼の目利きが優れたいたので、やはり、書き手がスゴイのであろう）。最終章（第6章）は本書の結部に相当し、保護管理計画の現状やその施策の評価（モニタリング）を含めた課題について論考している。この章の内容は職につながる分野でもあるので、救護と保護（管理）の区別が出来ないのにホゴを仕事にしたいと口にする学生が読むべきである。

『ニホンヤマネ 野生動物の保全と環境教育』

湊 秋作 著、東京大学出版会、2018年6月、268頁、本体価格4,600円

本書は次の9つの章（主題または副題）から構成される；第1章「ヤマネの生物学概論」、第2章「ヤマネ調査紀行」、第3章「繁殖」、第4「仔育てと成長」、第5章「ヤマネの音声」、第6章「冬眠」、第7章「保全」、第8章「ヤマネと文化」、第9章「環境教育」。ニホンヤマネが齧歯類であることは知っているが、「細かいことはちょっと」という方は、第1章で形態、営巣、行動、食性、天敵、国外ヤマネ類の系統関係と生物地理、国内における分子分類などの包括的な最新情報を得ることが出来る。齧歯類とは言いながら、盲腸を欠く事実（35頁）は虚を突かれた思いがした。また、第2章のニホンヤマネ紀行の中（72頁から78頁）に、巣箱や飼育小屋などをモチーフにした子供たちの版画作品を掲げつつ、著者の調査研究の様子が活写されていた。実は、1986年3月、和歌山県本宮でワカヤマヤチネズミを捕獲していた時、評者は地元の方から「（そんなことしているのなら、当然）ヤマネを調べているミナト先生のこと知っているだろ」と何度かきかれたことがあった。最終章の「小学校教師のころから研究は小さな研究室で収まらずに、研究成果を活用して社会貢献」（本書240頁）の理念を実行していた最中にニアミスしたのだと再確認をした。

評者とヤマネ類の関係はその15年後、2001年の英国でもあった。ただし、それはヨーロッパヤマネで、本書では229頁から230頁にかけて紹介されているように、同国内の森林地域への再導入のため、動物園で繁殖させていた個体であった。しかも、可愛い生体では無く累々たる死体。その死体を剖検すると、本来、ハツカネズミに寄生する線虫ヘリグモソモイデス・ポリジルス（Asakawaら、2006）。まさに、線虫の腸詰状態で、おそらく、主要な死因を構成したものと想像された。単純な話

で、要するにヨーロッパヤマネの人工飼育施設内にハツカネズミが入り込み、線虫卵をまき散らしたのである。同じ齧歯類なので、線虫発育は許容したもの、宿主-寄生体関係の安定的な進化を辿っていなかったため、このヤマネでは歯止めが利かなかったのであろう。ヨーロッパヤマネの新興感染症がかくのごとく発生したのだ。ハツカネズミは日本でも古くからの外来種であるが、これが、今すぐにもニホンヤマネの生息圏に大量に侵入することは考えられない。が、保全（生息地内を含む）を目指す場合、ニホンヤマネが保有する寄生虫や同じ生息地に存在する動物の病原体についてしっかり把握しておくことが肝要であろう。

さて、その保全の理論と実際については、第7章でしっかり触れているが、その手法の多くが生息地を横断可能な橋やトンネルの設置などであった。交通事故の犠牲者になる野生動物に心を痛めることも判るが、動物と衝突することでヒトが死傷するという側面は無視できない。そのような立場の方にもヒントになるであろう。特に、そのような契機となる事案発生場所が山梨県清里で、奇しくも、評者の故郷（韮崎）に近接した所である。そのため、ヤマネの生息地が重機で無残に破壊される模様を伝える画像（201頁）にはより衝撃を受けた。著者の活躍で持ち直し、これを機に、同地にやまねミュージアムという環境教育の拠点を設立したという（241頁）。研究・保全・教育・啓発とが混然一体となった、まさに著者らしい活動の発露であった。

引用文献

Asakawa M, Sainsbury AW, Sayers G. (2006). Vet. Rec. **158** (19) : 667-668.

『有袋類学』

遠藤秀紀 著，東京大学出版会，2018年4月，272頁，本体価格4,200円

本書は有袋類に関して、次の項目群に関し丁寧に解説されている；第1章（アメリカ有袋類とオーストラリア有袋類の進化・形態 [特に、育児嚢と歯列]・生物地理。註：ここでは章題そのものを示さず、扱われた項目を記す。以下、同様）、第2章（生殖周期および機能など）、第3章（白亜紀前後の化石、分子、大陸移動説などによる系統解析）、第4章（頭蓋および後肢帯の骨学と運動器との関連性）、第5章（食性と消化器系との機能・形態学的な関連性）、第6章（行動・社会および聴覚・視覚との関連性）。末尾には47頁分の大部な引用文献表が準備されており（なんと寛容な編集か）、有袋類の形態学や進化学を目指すものにとって有益な二次資料にもなっている。いやいや、それよりも書き手は「闘う解剖学者」だ。各章の序に遠藤節が炸裂し、期待通り、楽しめた。特に、第2章には昨今の大学に対しての痛烈な批判があり、さぞや溜飲を下げた同輩も多だろうと想像される。

だが、辺境に所在する私立獣医大の一教員である評者は、すっきりするのはほんの一瞬で、直ぐに生き残りのための所作を身に着けねえとならないことに気付く。カンフル剤は「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム（以下、コアカリ）」。（つい最近、17大学になった）全国の獣医大で教える内容を統一化し、国際水準にあった獣医師を養成することが決められた。そして4年時に、このコアカリで規定された内容をちゃんと学んだのかどうかを全獣医大で統一的な試験（共用試験）を実施することになった。これに合格すれば、5年以降のより専門的な実習受講が可となるという仕組みで（註：6年卒業時、農水省が実施する獣医師国家試験は別にある。詳細は、浅川，2019，参照）、もし、共用試験で大量に落第者を出せば、私大経営という面で深刻な問題に直面するのだ。したがって、（著者には叱られそうだが）サラリーマンでもある教員はコアカリに準じた「丁寧な」授業作りが求められていることになる。

ところで、コアカリに「野生動物（医）学」（応用獣医学，4年）という科目も配置された。獣医大に
来る学生の中には、野生動物、動物園・水族館展示種、エキゾチックペットといった変わった動物に強
い指向性示すものがある。なので、そういった学生にとっては、さぞやコアカリ「野生動物学」は歓迎
されるのかと思いきや、そうでもない。そういった挑戦的學生は様々な動物の疾病治療・予防に注視す
るが、これらの項目は「お宅の大学で余裕があったらどうぞ」の扱いにされている。このようなアラカ
ルト的な内容は「アドバンスト項目」と称し共用試験の対象外となる。ということは、事実上、授業で
は扱わないと読み替えられる（扱ったとしても、広範過ぎて、学部レベルで扱う代物ではない）。また、
学生さんも4年になると「普通の動物だけでいいや」と考えを変える者も多い。そのような状況下での
コアカリ「野生動物学」が講ぜられるのである。

それならば、コアカリ「野生動物学」で何を教えるのかというと、まず、保護管理（マネージメント）。
しかし、これは林学、そして現在は環境学あるいは応用動物学で中心的に扱われている。もちろん、実
際の施策では獣医学（獣医療）の技術も含まれるが、伝統的な獣医学の分野とは馴染みに難い。応用獣
医学の野生動物学となってもそれを支える基礎獣医学が無いのだ。

一方、共用試験対象項目として規定されている「野生動物の形態・機能（解剖・生理）」は別。基礎
獣医学の家畜解剖学・生理学が1, 2年あたりで徹底的に教育される。しかし、この時、個々の表現型は、
そういうものがある！という事実の記憶だけで、究極要因的な解釈が欠落したままであった。これはか
なり苦痛である。しかし、コアカリ「野生動物学」では適応・進化の文脈で講ぜられるので、だいぶすっ
きりする。いや、この部分だけでも、1, 2年時に行えば、典型的な解剖学にとっても効果的な学習効果
が得られるだろうに。いずれにせよ、「野生動物の形態・機能」の授業の良し悪しは扱うモデルによる。
そのような意味で、本書で物語られた有袋類の形態・機能と生態・進化との密接な関係性の物語は優れ
た授業モデルとなること間違いなし。おや？著者の思惑とは異なり、最終的には一地方私学の生き残り
という経営に手を貸すことになりそうぞ。

引用文献

浅川，2019 獣医大新設騒ぎに想う。生物科学, 70 (2) : 124-125.

『生物科学』の書評概観—書評誌という側面から

『生物科学』（以下、本誌）の書評担当副編集とは、出版社から本編集委員会宛に送付される書籍を委員会のメンバーに告知、書評を依頼し、転送後は書評原稿の確認・督促する係りである。また、頁が不足した場合、急遽、自ら執筆することも重要な役割であることも付け加えておかないとならないが、このことは後でも述べる。本誌には、明らかに広範・多様な生物学分野の書籍に関する書評誌としての側面も有する。したがって、僕は非常に強力な緊張感を持ってこの任に就いていた〔註：担当任命時の背景などは拙稿（浅川，2016）参照〕。本誌休刊となる局面を迎え、今回、たまたまそういった立場であるので、（任期たった約4年と70年の本誌歴史と比べると非常に短いにもかかわらず）、本誌創刊から最新号に掲載された書評概観を行うことになった。

今回の作業では次の巻号を僕は見ていない（註：括弧内数字は号を示す。以下同様）；1 (1, 2, 4), 2 (1, 2), 3 (4)および19 (4)。また、旧巻号では「書評」が目次上に提示されていないこともあり、各々の冊子を逐一めくっての確認が必要であった。膨大な冊数を短期間で作業する必要があったため、見落としの危険性も孕む一方、通常論文とされていた中にある書籍に対しての非常に詳細な論評（大概辛口）したものも見出された。本稿ではそのような論文も書評として見なした。さらに、以前巻号では散発的に「書籍紹介」なる項目が設けられたが（註：書評・書籍紹介との差異は、再度、後述）、当該の項で掲載された中には、かなり踏み込んだ論述もあり、同じく、書評としてのカテゴリーとして扱った。

概観の記述は経年的に実施した。『生物科学』の歴史は、編集主体および出版元により次の4期に区分されたので〔中村，1998。第1期：1 (1)～2 (4)，第2期：3 (1)～18 (4)，第3期：19 (1)～46 (4)，第4期47 (1)以降〕、本稿もこの区分に準じた。

第1期： この時期刊行のものは、前述の巻号欠のため、僕が直接検討出来たのはたった3冊であった。これらの中で書評が確認されたのは、2 (4)に掲載された個体群・生息環境に関するもの1本のみであった。非常に限られた調査ではあったが、二つの号で書評未掲載という状況は、少なくとも、創刊時、本誌が書評誌を目指すものとしては期待されていなかったか、あるいは、当時の出版事情を反映（評したくても、本が無い）していたのかもしれない。

第2期： この時期に刊行されたものは60冊の通常巻号に加え、5つの特集号も存在し、計65冊となった。この時期、本誌編集主体は進化や遺伝学などに関するシンポジウムを開催し、そのプロシーディングが特集号として刊行されていた。しかし、このような特集号が刊行されたのはこの時期のみであった。学会特集号の性格上、書評は掲載されないものだが、第7巻のそれでは当該シンポジウムに直結する遺伝学の書籍書評が1本認められた。前述のように未調査であったのは3 (4)ただ1冊であったので、直接検討出来たのは64冊、うち書評は計122本が認められ、とくに、第8巻（1956年）以降はほぼ毎号書評が掲載されるようになった。また、対象とされた書籍の分野も、まれに6 (2)単一号に7本もの旧ソ連刊における農学書が掲載されたようなこともあったが（註：当時の編集主体の性格が反映？）、その他巻号は、概ね、細胞・生理から生物地理・生態学まで幅広い関連の書籍が扱われていた。創刊から7年ほどで本誌は書評誌としても歩むことが決したことがうかがわれた。この前後では、たとえば、4 (4)では人類学を論じた投稿論文のカテゴリー中に関連書籍の詳細な分析が含まれ、10 (2)ではその著者が著した『改訂進化論』に対し3名の異なる専門家から論評される「書評論文」（註：本誌ではこのカテゴリーは未設定）の掲載が盛んであったことも、本誌の書評誌としての位置付けを確固たるものにしたと感じた。

第3期： この時期の本誌には特集号は無いので、通常巻号の計108冊が出版され、うち1冊が実見出

来なかった。この時期、目次上の項目が不安定で、項目「書評」の欠落や項目「新刊紹介」の出現は、作業が混乱させた。さらに、前期と同様な「書評論文」の投稿もあり、たとえば41 (4)のチャールズ・ダーウィンに関する書籍に対しての辛口のものがあった。これが契機となったのかどうか定かではないが、その次号から項目「書評」が復活している。しかし、前述の辛口書評論文の同一著者が、45 (2)で研究者の「学力」についての論考の中でも、書籍の内容に踏み込んだ分析が展開し、さらにその書籍著者からその次号で反論するなどがあった。かなり激しいやり取りであり、知力・活力に富んだ先達たちの姿を想像させてくれた。誌面が活発なのは歓迎すべきだが、目次項目の見え隠れのような体裁は困る。おそらく、この時期当初の編集主体変更に伴う混乱の影響であろう。このような不安定な状況ではあっても、ごく一部の巻を除くけば書評掲載は堅持された（計107冊に145本の書評が掲載）。ただし、前時期は1冊に平均1.8本の書評掲載数であったので、この時期は1.4本／冊となりやや中弛み傾向ということか。

第4期： この時期には計92冊刊行（予定）となるが、本文執筆の2019年1月末現在では70 (1) までが刊行済なので、集計はこの巻号までの89冊とした。そうなると書評（追悼号に併せた寄稿含む書評論文も加えた）は計419本認められたので平均4.7本／冊、前期・前々期の実に3倍超えである。中弛みからの復活を超え、本誌の書評誌としての性格が一層強化されたものと解される。実際、49 (1)から現行タイプの表紙に一新され、項目「書評」には対象書籍名が明示されたが、単一卷号で12本もの書評が掲載された52 (1)や61 (3)などの表紙は圧巻であった（注：個人的な思いを語るようで恐縮のだが、後者は僕の書評担当就任時のものであったので、一人、密かに感激した）。加えて、55 (1)から57(4)までは、本誌編集委員（当時）であった三中信宏氏による「“みなか”の書評ワールド」が書評コーナー以外場に連載された。この連載では最終的に計45本が掲載され前述した驚異的本数伸長の主因となった。なお、66 (1)以降には本誌編集長（当時）の上田恵介氏発案で出発した「“アサ”の書評ワールド」があるが、「“みなか”の書評ワールド」に比べるとだいぶ見劣りするし、そもそも連載という形式を踏襲していない。元々このコーナーは原稿が足りなかった非常時の安全弁であった。そして、「“アサ”の書評ワールド」は70 (3)の第4回をもってその使命を終える予定である。このような形で最後まで本誌を支えさせて頂いたことは僕の生涯の誇りとしていたい。

本誌後継書評誌への伝言： 確かに、書評本数の伸びは喜ばしい。ただ、これは編集委員会の中でも指摘されていたが、現行書評の中には書籍紹介に近いものが少ないという。正直に告白するなら、僕自身が認めていても、出来上がりは書評としては烏滸がましいなあというものがある。この点は大いに反省をしたいが、だからと言って、書評および書籍紹介を分けて項目を立てると第2および3期に見たような混乱が生ずる危険性があるので慎重に考慮したい。本誌に掲載された書評論文は、それはそれで刺激的で、ある意味、真の書評と言えるかも知れない。もちろん、相当な力量が要求されるので、覚悟をして向かい合わないとならない。しかし、まずは日本語の訓練としても、学部生や院生には、書評（あるいは書籍紹介）を果敢に執筆をして欲しい。そのためにも、本誌のように原稿を丁寧にチェックする投稿先が必要なのだが。もし、叶うことならば、本稿が後継となる書評誌誕生の一契機となれば望外の喜びである。

最後に僕の役目をこのような形で締めくくらせて頂いたことに、本誌編集委員会各位には感謝である。また、前述したような急遽執筆のため、急ぎ、本誌バックナンバーを揃えなければならなかったが、酪農学園大学図書館および北海道立図書館の司書各位に助けられ、無事、参照出来た。深謝したい。

（本誌副編集長）

引用文献

- 浅川満彦 2016 生物科学 **67** : 65.
中村禎里 1998 生物科学 **50** : 5-6.